

先日、アメリカでは中間選挙があり、ブッシュ大統領への批判が形となる結果になった。国民が直接大統領を辞めさせたり、選んだり出来るというのはこんなにも国民を興奮させるものなんだと改めて思い出した。

2002年12月、ケニアでは大統領選挙が行われた。結果的には、25年続いた与党KANU（‘ケニアアフリカ人同盟’）を率いるモイ大統領が敗北し、野党NARC（‘国民虹の連合党’）のリーダーであったキバキが勝利し、大統領となった。意図することなく偶然この年にケニアに滞在していた私は、ケニアの歴史的瞬間の一部始終を自分の目で見ることが出来た。

ケニアは1895年にイギリス領になってから、1963年にケニヤッタ大統領が独立を勝ち取るまでに長く植民地の時代が続いていた。独立しても完全に独立したと言えず、旧植民地の影響を政治的、経済的に受けてきていた。それは、イギリスの議会制を継承し、また憲法もイギリスの影響を受けるなどの政治体制に強く表れている。ケニヤッタ大統領は「ケニア建国の父」と呼ばれ、今でも国民の尊敬と憧れの的であり、国会議事堂の横にお墓が作られ、一般の人でも外から見学出来る様になっている。

そして彼のあとを継ぎ、その後のケニアを今の姿を作ったが1978年に誕生するモイ大統領である。大統領の任期は憲法で5年と定められているが彼は5回も再選を果たし、25年に渡りケニアの大統領に君臨し続けた。

ケニアだけに限ったことではないが、アフリカでは植民地からの独立後誕生した国家の大統領は長期政権になることが多く、また一党独裁政権であることが比較的多い。そのことが結果的に、一部の階級への富の集中、政治家の癒着、汚職、貧富の格差といった問題に繋がってきたことは確かである。モイ大統領も自身の出身部族であるカレンジン族を積極的に要職に就かせるなど自身の民族をかなり

優遇していたことは有名である。結果、ケニヤッタ大統領の時はプラス成長を続け、最高6%の経済成長を見せていたケニア経済も、モイ大統領が大統領に就任した1978年の5.2%を境に下降線を辿り、2000年にはついにマイナス0.2%の成長となっている。

そして、2002年の大統領選挙にモイ大統領は出馬せず、ケニヤッタ大統領の息子のウフル・ケニヤッタを推薦しKANU（‘ケニアアフリカ人同盟’）体制の継続に努めたが、国民は、野党連合のNARC（‘国民虹の連合党’）を選んだ。ケニア独立後初めての野党政権となったのである。

ケニアの経済が伸びていかず、貧困も解消せず、失業率が50%以上とも言われる状況が続き、人々のKANU体制への批判は、そのままストレスとなりケニアの方向性をケニア国民一人一人の手で変えようという動きへと発展していった。その頃のメディアや人々の会話には、NARCに賭ける思いがあふれていたように感じた。大統領選挙は直接選挙なので一人一人に選挙権がある。また議員を選ぶそれぞれの選挙区でもNARC支持の候補者は地元の強い支持を受けて選挙戦を展開していた。街頭パレード、演説、ビラ配り、ポスターを貼り、選挙カーで支援を呼びかける等、選挙活動はとても熱狂的であった。特に若い世代は熱狂的にNARCを支持し、その熱がKANU批判に繋がりと、選挙区によっては強く対立した結果、暴動になることもあった。選挙権のない私にも、NACKを支持することの大切さを延々と話し始める人、歩いていてもビラやポスターを持ってくる人もいる。「ケニアを変えよう」という信念で人々は活動していた。

そしてNACKは222議席中125席を取って与党となり、その中心人物であるキバキを大統領にした。キバキはケニア最大部族のキクユ族出身であり、ケニアで国会議員をする前は、ウガンダのマケレレ大学の経済学部長として長年教職に着いていて、国費留学してイギリスのロンドン経済大学で

学んだエコノミストであり、経済は彼のライフワークであり、専門とするところである。そのことへの国民の期待も大きかった。ケニアの経済を立て直してくれるのではないかと。そして、彼が就任後特に力を入れたのが汚職追放ということであり、職権乱用、特定部族優遇が常であった国会から汚職担当大臣や部署を作り徹底的になくしていこうと努力している。ただ、大臣にはキクユ出身が多かったが「優秀な人を適切なポジションに置いただけ」と彼は言っていた。

実際、ケニアの生活は外国人の私が見ても分かるくらい、少しずつ無駄や非効率的なことがなくなってきたな、と感じる。目で見えて分かる例としては、公共の移動手段マタツの概観を白色に統一し、定員も定め、シートベルトを着用を義務つける。ストリートチルドレンを直ちに政府が保護し、町にあふれないようにする等。一人一人が国を変えていく、良くしていくという気持ちになっていることが今のケニアのエネルギーになっていると思う。もちろんすべては一日で変わらない。しかし、変わろうとしている今の流れを保っていききたいものだ。

現在ケニアのGNPは2006年6%を越えていて、2007年には6,3%になるのではないかと世界銀行などは予想している。2005年には、憲法改正に伴う国民投票を実施し、植民地経済からの真の解放を目指して、ケニアは熱いスタートを切ってから4年、その結果は少しずつ統計にも表れてきている。しかし、統計に表れない人々生活の向上として形に表れるのはまだ時間がかかりそうだ。来年は再び大統領選挙の年だ。キバキ大統領は続投するのか、国民はこの5年間の審判を来年下すことになる。

「もったいない」で日本で有名になったワンガリ・マータイ環境副大臣は、環境の分野でノーベル賞を受賞したが、彼女の選挙区はTETUというところで私の旦那のふるさとこの選挙区に含まれていて、この地域にも昔からよく植林活動に来てくれていたそうだ。明日どうなるという生活の中で暮らす農村の人々に「木を切った分だけ植えよう」と教育し、実践させていった彼女の功績はとても大きいと思う。ちなみに彼女もNACKの議員である。